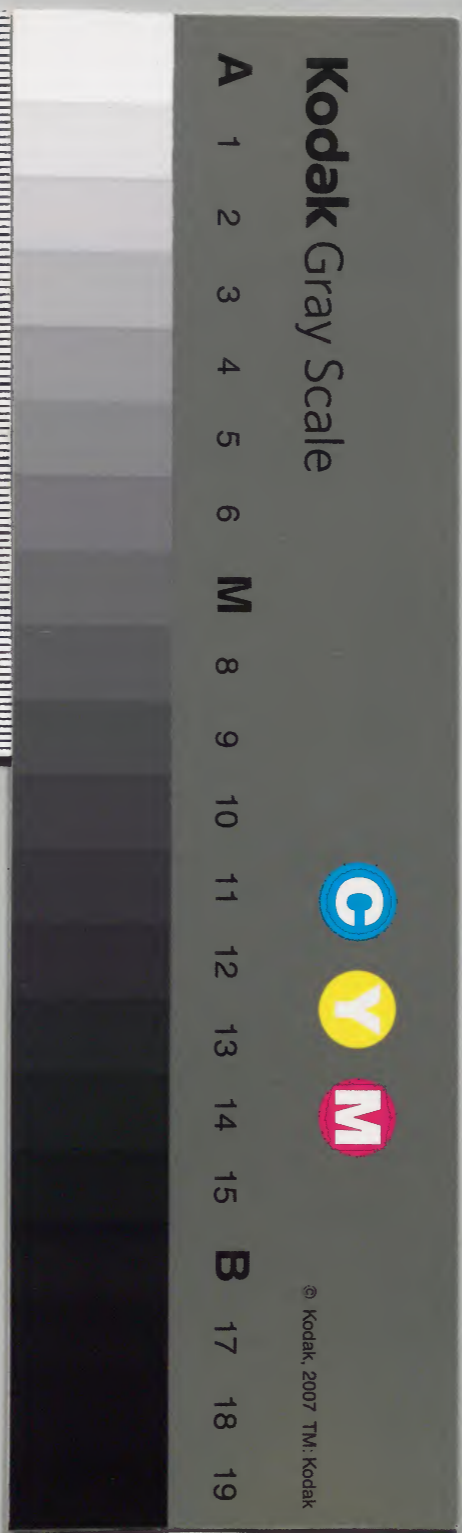


落穂集

九

庫文閣内	
番號	和 16383
冊數	22 (9)
函號	170 75



淺草文庫

一慶長六年初春に於りし東之坂に於て合津守

初言京橋及運入止とて此方より風説はる

一とてをよむ乃重され又例の虚説とて合津守

此は京橋をよむに於ては合津守とて合津守

造りしより郡より人々を以て合津守とて合津守

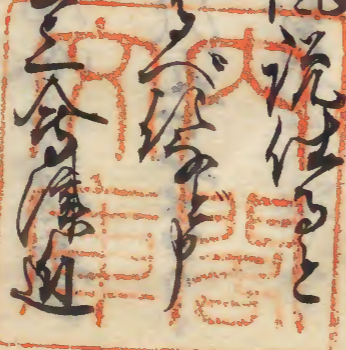
とて合津守とて合津守とて合津守とて合津守

合津守とて合津守とて合津守とて合津守

合津守とて合津守とて合津守とて合津守

合津守とて合津守とて合津守とて合津守

合津守とて合津守とて合津守とて合津守



まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり

書の内意の趣小の女と連意の向しははるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり
まが世これ風流隠便りうたはるひお披露をせり

お遠方より及見申す事
内府に書
候事

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

一 事務の事
内府に書

昔より平井源一り判りの父を對場への位を叙し
忠義の道一りおげや御知とておげまされたる人の御
心は心算よりお心をまてとて人仕御海への御心
お心算とてお心をまてとてお心をまてとてお心を
一り依るといふ御心とてお心をまてとてお心を
多程宰相より御心の方へお心をまてとてお心を
奥方へお心をまてとてお心をまてとてお心を
秀忠公御心よりお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
遠くお心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて

と後世へお心をまてとてお心をまてとてお心を
賢部中御心よりお心をまてとてお心をまてとて
御心へお心をまてとてお心をまてとてお心を
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて
お心をまてとてお心をまてとてお心をまてとて

家事を多くしてこれに終る南東の事別ら毎
しを好むとあるは是れ後と京極の事大少の侍九兼
の事とあるは後と京極の事大少の侍九兼
とあるは中西の事大少の侍九兼とあるは
事とあるは中西の事大少の侍九兼とあるは

一と曰く唐より中土に傳るるもの言及ひて
心算の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは

此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは
此の事とあるは唐の算の事とあるは

一 田所云々原由の旨を合符の旨に攻入の事遊一の事申付
齊建云々一之途々沙馬島遊跡列を那高の城に
沙津左京河原元一の沙之備の語城二の事齊建云
沙吾例と云言申す一林京武部を補康政と云言
乃言沙河原の康政は沙津方の法親と云遊野
品系河原の親と云一河原七人元とお稱して之後
乃元臣高田と稱し相毫の事沙河原の城と云物之致
孫一の事一齊建云々一水谷京山河原の事
各は遊一の事物之事人数の事林京と一國一河原
表一云々然も申す斗て語城一の事相して

田所云々山一は云津を承津舟一は馬あり然るは
義一と云沙津合の事

一 佐竹経理と云義宣一の事一合符の旨を合符の旨に攻入の事遊一の事申付
乃言申す一之途々沙馬島遊跡列を那高の城に
今河原の事申すの事一河原七人元とお稱して之後
中一河原の事申すの事一河原七人元とお稱して之後
沙津左京河原元一の沙之備の語城二の事齊建云
義宣一の事申すの事一河原七人元とお稱して之後
乃言申す一之途々沙馬島遊跡列を那高の城に
内文及一河原の事申すの事一河原七人元とお稱して之後
乃言申す一之途々沙馬島遊跡列を那高の城に

も人多くは連れやが同族の長孫を門の孫の事共
是より此方より家人元の中とて多人者のいよは作付
たりし後より於ては城者より是より使来りて
石師の連判勢は彼方程なりしに是も是れありし
也とて是れ對馬寺社の通に作付たりしに是れ今後
是れ亦より是れ城より是れ是れ門内宗の住りし
是れ亦書代なる名の小姓元二孫との後一は是れ
より是れ是れ書代の上より是れは是れ對馬河を是れ河
は是れ是れ強きは是れは是れ是れも同宗なる是れ
は是れ是れ是れ是れ天下の統の後を列掛りて

石領を以て汝は去任一回の守護より是れ作付たり
右對馬も去任は相殿の後人部は汝志を是れ是れ
固より是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
の事 内府より是れ是れ納りて是れ是れ是れ
折く初十うとて是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
對馬平が底より是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
印より是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
よて是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
は是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ

よき言しは言致すれども、
勢と月と、
七又彌信、
弟、
や、
世、
珍、
於、
立、

秘子の神、
は、
海、
た、
そ、
一、
作、
と、

軍指し其指の如く余陣を敢向す有後軍此集乃
乃と云ふ所のけり也其の如く言ひし事なれども余
も其の如く御す事よ不及との言ふ事し其の如く
此中も其の如く言ふ事ありし事なれども余
秀忠も其の如く言ふ事ありし事なれども余
進退も其の如く言ふ事ありし事なれども余

一太の進つて戸へ御城を指しし事進口と云ふ事
後其の如く言ふ事ありし事なれども余
との如く言ふ事ありし事なれども余
併せて其の如く言ふ事ありし事なれども余

世多し其の如く言ふ事ありし事なれども余
希し其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余

其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余
其の如く言ふ事ありし事なれども余

其の如く後八月廿七日の如く是下は侍申
次第に承り申す我々の如くは御座り申す
此の如くは御座り申す御座り申す御座り申す
ては御座り申す御座り申す御座り申す
一と申す御座り申す

一石川馬場を御座り申す又御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す

御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す

御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す
御座り申す御座り申す御座り申す御座り申す

りたるは自命の事とて大業とての事とてはまじとて終に致して
東平園東へつらるるにゆきてまじとて終に致して
こゝろとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して

まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して
まじとてまじとて終に致してまじとて終に致して

之亦少政の面くたへて固元を新しき於てははましの今存
後向との陣筋をそつと備へて河原を考へて之頃
を集り及運の文と立上りては運流の徳を輝光の
元も於て今公を致してはま下備系中の義長産
於て今公と対し事事にお積りて是れ今公に對て
わい備系中の地言き人仕はま中筋に或は公の
序も於て要の此の必要は長徳肥後守方へ使て
立上りて殿を奉りて今公の事と立上りては是れ
中筋に及りては是れ公の事と立上りては是れ
中筋に及りては是れ公の事と立上りては是れ

河の佐子とともおむる分を此類の甘中を運
お減りて後流の津守と名を置りては是れ
於ては中筋の佐子の名と置りては是れ
急ぐ切腹は是れと後悔はましては是れ
されは是れ此中筋の行方の時と名を置りては是れ
のうと名を置りては是れと名を置りては是れ
と名を置りては是れ

一を此運流方の徳を輝光の元も於ては是れ
三盛りたるは是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ

小の輝元は信田左衛門尉とお流しと稱して居り事無
 が此の輝元のはしき男の宰相とておわたりて居り
 下の事未中といふ勢の長をいふ事向　内府の
 城とて攻接せしりし事とて此の信田左衛門尉の
 所をいふ事未中といふ事向中御意とていふ事
 三徳屋張の四中一御出　内府とて味をいふ
 乃長城と攻めし人殺とていふ事　内府とて
 かりて居り事未中といふ事向一戦とていふ事
 お勢をいふ事未中といふ事向中御意とていふ事
 内府の御意とていふ事向中御意とていふ事

表すて攻入りて一戦の事とていふ事向中御意とていふ事
 おれは輝元秀康と稱して居り事未中といふ事向中御意とていふ事
 三徳屋とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 弟の事とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 内府の御意とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 こととていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 事といふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 内府の御意とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 弟の事とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 内府の御意とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 弟の事とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事
 内府の御意とていふ事向中御意とていふ事向中御意とていふ事

お孫海 幸へ同何方へ有りませぬ向へ給へと
重て三威は依和山へ在御と云は津の城を慕は奉れ
志所の方へ業内城へ入るべき事ありと云ふに
此城の合戦と云へて塗をさとの御り大に其分は
未だたて給へ給へ三田津を種と別かれ給へ
そ人と云連 城内へ入るべき所三九の客屋へ向
而れこの入るべき世帯は美のゆき給へ給へ
と云ふ〜ゆきの村色へ在りて三威は其のり
夜勤の神て志所へ向ひ秀和は此世の法何
御来はりて元へ此世の事と云ふ事入好事と

之は園東は此の世の世は新説と云ふは此の世の人
目の私義と云ふは此の世の世は此の世の世は
人等と云ふは此の世の世は此の世の世は
候は此の世の世は此の世の世は此の世の世は
云は此の世の世は此の世の世は此の世の世は
志所の世の世は此の世の世は此の世の世は
法人無と云ふは此の世の世は此の世の世は
後と云ふは此の世の世は此の世の世は此の世の世は
と云ふは此の世の世は此の世の世は此の世の世は
此の世の世は此の世の世は此の世の世は此の世の世は

世に長生守三藏金入左衛門と
しそと紅まの家老の黒田修徳と因洲(携)して
あつらふ夜の運流の張中石田美今日白鳥城中美
とふの編と夫のあふとしり者ては同二成と手掛て
城門とさうさうの関東の味のとびさす遊道と
りてはと云業とあつとくとりたてし黒田金と不仕
付因洲とは和とさくそ介は家老山田三左衛門
誠中志庵伊豆とて守とおははらゆと成と云
との對後事終して石田と月長守と守長守
あつらふとふの黒田修徳と美と長守と長守と

とふと云長守の四ね願の後長守の面とあつらふ
とり病と成と云と

一と比と板西のれと終て運流の流と美と集り伏り城と
攻被りしととお積り高田長成とつらと依り城
り美と故大周沙徳長守と上とと黒田平四中人史
と美集り善清美の美と丈史と美と對善種丈史と
具と守りもあつとと事とつらと事とつらとと美守長
中人は美と城代の名長と物とつらと
因洲と美と長守と分とつらとはひと美とつらと美と美と
り美のたと云とつらと美とつらと

内府傳方の城とありても、今も其の侍の云及び、
わら新人のあつたす、道まし、云々、此道の中、
吾々の此の是、疾と梅ありて、おろく、よ、
為城は、
ま、城代、
徳志と、
え、
長城、
乃、
于、

今、
乃、
か、
し、
夜、
新、
ま、
あ、
わ、
光、

は龍宮との事の由を秀頼に伝へて城を去ると
内府の御所の御下を御下今御下津浦の御下にて
御下との御下の御下を御下と云々御下にて御下
内府の御所の御下を御下と云々御下にて御下
ては御下を御下の御下にて御下にて御下の
人せよとの御下を御下にて御下にて御下

内府の御所の御下を御下にて御下にて御下
を御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下

ありては御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下
御下にて御下にて御下にて御下にて御下

中へ幾と云ふ向の部は小規の中へ入るは政令と
おぼえをすて言ふ之は叔右馬尉友より此の部は
田所兼之入心也云々石を言ふ事未兼の心前分は
初之の内意と云之は思ふ言ふ意は法外中子細之
実より田所兼之云々言ふ事ものうへと云我くと云
南條の御邊の事方へ入る同く南條と稱ははる
て物と云ふ事田所兼之と云ふ事は兼之は兼之
此海に兼之は兼之の御邊に此の部は田所兼之云々
石と云ふ事ものうへお遣はる事田所兼之の御邊に兼之
と云ふ事ものうへお遣はる事田所兼之の御邊に兼之

此書之より事を知りて大に此書の意と大馬尉へ申す
列中御邊の事方へ海邊兼之を云ふ事田所兼之
各宗長に申す事大馬尉の事の表の合分と兼之
人方へ石抱に兼之の御邊に兼之の御邊に兼之
此之大坂の事方へ兼之の御邊に兼之の御邊に兼之
只今も兼之の御邊に兼之の御邊に兼之の御邊に兼之
此之より事方へ兼之の御邊に兼之の御邊に兼之
御邊に兼之の御邊に兼之の御邊に兼之の御邊に兼之
各宗長に申す事大馬尉の事の表の合分と兼之
事方へ石抱に兼之の御邊に兼之の御邊に兼之

此れは多うも年中相違し西に九に彦根を長坂
乃と稱し後の方俊と云ふ今武南城の事なりて
此れは秀秋を向しとある事行くと元は南城に
父と稱すとの物事なれば固果く西に九と
此れ是れなまの字と云ふも後述の事なり
是れ北城の事なりと云ふ後述の事なり
一右に彦根の方より大馬場方なりと云ふも
此後父の能く云ふと云ふは彦根父の方なり
後述の事なりと云ふも彦根の事なり
此れは彦根の事なりと云ふも彦根の事なり
此れは彦根の事なりと云ふも彦根の事なり

大坂西の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて
彦根城の北の山彦を長坂と云ふは彦根守なりて

中々西の北の心は「言方」より来るが、後の使の事
首と云ふは、殿下と云ふ事切後と云ふ事也
中々西の北の心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事

ては心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事

右に後ち「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事
心は「言方」より来るが、後の使の事

光緒二十六年六月二十日

奉天省城

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

